



立川総合病院消化器センター
外科 主任医長
日本ヘルニア学会評議員
蛭川 浩史

ふくへきはんこん
腹壁癒痕ヘルニア

この特集も今回で最後になりました。これまで、鼠径ヘルニアについて述べてきましたが、今回は手術の傷跡にできるヘルニア、腹壁癒痕ヘルニアについて述べます。お腹の手術のキズあと（これを癒痕（はんこん）といいます）にできるヘルニアです（図1）。傷を縫い閉じた部位の、筋膜の癒合不全が原因で、お腹の手術を受けた方の10人に1人程度の割合でおこります。肥満、喫煙、糖尿病、腎不全、肝硬変、喘息などをお持ちの方や、手術後に傷が化膿した場合ではさらに高頻度になり

ます。100kgオーバーの体重がさほど珍しくない肥満の多い外国では、腹壁癒痕ヘルニアは鼠径ヘルニアなどより大問題になっています（図2）。日本でも糖尿病や肥満が増えています。腹壁癒痕ヘルニアは今後、さらに増えていくと思われれます。腹腔鏡手術の小さな傷でも、開腹手術と同じくらいの頻度で、癒痕ヘルニアができるとされています。

治療は、ヘルニアが小さく症状が無い場合、手術を受けたくない場合、何らかの理由で手術できない場合では、経過をみる場合があります。この場合は腹帯、腹巻きなどで

(図1)



(図2)

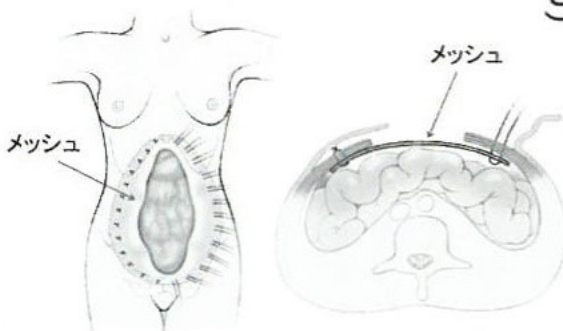


押さえておいた方がよいでしょう。また、定期的に診察を受け大きな変化がないかどうかをチェックすることも大切です。

手術には、弱くなった部分をもう一度縫い直す方法と、メッシュを使用した方法があります。縫い直すだけの方法は、メッシュを使用する方法に比べ、再発率がとても高く、特殊な場合にしか行われません。主流は、鼠径ヘルニアと同様にメッシュを用いた方法で、開腹手術と腹腔鏡手術の両方が行われています。メッシュは鼠径ヘルニアで使用されるものより、何倍も大きなもの

(図3)

手術のイメージ



が必要になります（図3）。絶対に感染しないように、細心の注意を払って手術を行います。メッシュを用いた場合でも、20人に一人くらいヘルニアが再発するとされ、鼠径ヘルニアよりずっと高率です。開腹手術では、横向きの傷、肋骨下の斜めの傷、L字型や、逆T字型など、いろいろな切開が行われてきました。このような傷のどこにでも腹壁癒痕ヘルニアはできます。このような特殊な部位や、大きな腹壁癒痕ヘルニアに対する治療はとても難しいので、ぜひ、当院にご相談ください。